

## ジョージア (グルジア) 便り その41

## 『人種のるつぼ』

文 高野陽年 text by Yonen Takano

今日は「トビリシの日」と言われる祝日で屋台が立ち並び、野外ステージが至る所に建てられ、その上でジョージアンダンスやフォークソングが披露されている。かつてジョージアの王が温泉の湧き出る場所を発見しそこにトビリシ（暖かい場所という意味）という街を構えたことを祝う日である。今となっては収穫感謝祭的な要素も加わり、街はいつにも増して賑やかである。皆、屋台で焼かれる豚肉のバーベキューとワインを片手に秋の夜長を楽しんでいるようだった。

僕も串刺しを片手に、秋の月明かりに照らされ一層神妙な表情を見せる旧市街地を歩くことにした。崩れかかった建物が並ぶ不気味な通りも今日は人が多く、奥へ奥へと進んだ。旧市街には見慣れたジョージア正教会の建物だけではなく、ユダヤ教のシナゴグ、アルメニア正教会、ロシア正教会、カトリック教会、はたまたゴロアスター教寺院跡まで立ち並んでいる。小さいエリアにさまざまな宗教が入り乱れているのだ。それはジョージアが多民族

国家であるまぎれもない証である。

屋台で肉を焼く彼も、ジョージアンダンスを披露する彼女も代表的なジョージアの苗字である「〜シヴィリ」と名乗っていても、実はユダヤにルーツを持つものであったり、ロシア人であるかもしれない。先日僕の髪の毛を切ってくれたスタイリストはクルド系だと言っていた。さらには一般的にジョージア人とカテゴライズされる人々も、実はもつと小さい分別に自分を見出す者が多い。例えばメグレール人、スヴァン人、オセット人いずれもジョージアの各地域出身者だがそれぞれ確固たるアイデンティティを自らの民族に持っている。ヨーロッパとアジアの間に位置し人々の流入が激しく、外からの侵略も度々受けていたジョージアでは古からさまざまな民族が住み、そして互いに交じってきた。

僕らの感覚で「日本人」といえば、すなわち殆どが生物学的に同じルーツを持つ人種であると考えられる。僕らはその尺度でジョージアにはジョージア人、スペインにはスペイン人、イギリスに

はイギリス人がいると捉えがちである。他国で起こっている独立運動が人ごとのように思えるのもそのせいだろう。しかし日本は特殊なだけであって、人口400万の小さな国ジョージアであつてもさまざまな人種が共存しているのだ。

では何が彼らを「ジョージア人」にするのか？それは共通の歴史と文化の共有である。ゴルガサリ王が温泉（トビリシ）を発見したことに敬意を表し、ジョージアンダンスを踊って、ぶどうの収穫に感謝する。

実は僕も大きな意味ではすでに「ジョージア人」なのかもしれない。

## Profile

2011年にロシアの名門ワガノワバレエアカデミーを卒業し、世界的振付家ナチョ・ドゥアトの指名を受け外国人初の正団員としてロシア国立ミハイロフスキー劇場に入団。主にドゥアト作品で活躍した後、2014年6月より世界的に絶大な人気を誇るバレリーナ、ニーナ・アナニアシヴィリに引き抜かれグルジア国立トビリシ・オペラ・バレエ劇場に移籍。現在はその団の主要なダンサーとして国内外の公演で劇場を牽引している。立教大学中退。

